

評論 (Review)

CLIL の視点を活かした小学校外国語教育と 社会科の学習知の融合

——社会科での地球的課題の学習知を活かした英語教材の開発——

**Fusion of Learning knowledge of Social Studies and
Elementary School Foreign Language Education using a
viewpoint of CLIL: Teaching materials development of
English utilized Learning knowledge of Global Issues in
Social Studies**

宇土 泰寛*
UTO, Yasuhiro*

摘 要

国連を中心とした地球的課題の解決に向けた世界的な動向と新学習指導要領に提示された日本の教育改革の動向は、ESD（持続可能な開発のための教育）やSDGs（持続可能な開発目標）の提唱によって、非常に深く関わり合う課題となってきた。そこでの地球的課題は、具体的な問題として地域の人々に降りかかるように、グローバルな問題でもあり、ローカルな問題でもある。この課題には、地域の探究学習と大陸を越えた宇宙船地球号の乗組員としての協働的な問題解決活動が必要である。

ここに、国際言語としてのコミュニケーションツールの学びとなる新学習指導要領での小学校外国語教育とグローバルな課題の内容としての社会科での学習の知とのつながりが生まれるのである。しかし、日本での小学校外国語教育での学習には、語彙数、文構造など、大きな限界がある。この限界に対して、社会文化的アプローチなど、学習論的転換、ヨーロッパの英語学習で注目されている CLIL の視点の導入や方法論的な工夫と改革が重要である。言語の壁を低減する学び合いの方法を開発し、大陸を越えた新たな学びのステージでの学び合いを探究していきたい。

キーワード：外国語教育，社会科教育，学習知，地球的課題，グローバルスタディ

Key words：Foreign Language Education, Social studies, Learning Knowledge, Global Issues, Global study

1. はじめに

世界各地で、地球的課題として様々な問題が生じている。このような事態に対して、国連では、2030年までのSDGs（持続可能な開発目標）を定めている。グローバルな課題とローカルな課題が密接につながり、ESD（持続可能な開発のための教育）による課題解決に向けて市民の育成が求められている。しかし、国境を越えた学び合

いが実現可能な時代になった現在でも、教育の場では、知識伝達型の一斉授業が中心である。しかし、新学習指導要領は、世界的な動向も踏まえながら、教育の大改革をめざしている。そこで、地球的課題を宇宙船地球号に生きる人間として国境を越えて共に学び合う方法とそのコミュニケーションツールとしての外国語学習の在り方を探究してみたい。

2. グローバル化と英語教育

(1) グローバル化と多文化化が進む地球社会と社会的意識

産業革命での蒸気機関の発明は、交通機関の大革命を引き起こし、アメリカ大陸横断鉄道の開通、風に頼る帆船から蒸気船による大西洋・太平洋の横断を可能にし、世界一周を定期化した。この交通革命から150年間で、更に交通機関の発達はずまじく、急速に国境を越えたモノ・カネ・情報、そして、人の移動が増大し、国際化からグローバル化へと進み、地球社会が形成されてきている。

しかし、人々の移動による異文化接触は、その時代によって大きく異なるものであった。交通改革の前まで、各大陸の気候風土に合わせて、人類は各々の身体的、文化的、社会的な適応をしながら過ごしてきた。歴史的な時代の変化の中で、国境を越えた人の移動は、国を追われた難民、貧しさからの移民、そして、受け入れ社会での偏見、差別など様々な負の問題も引き起こしてきた。植民地では、人種主義による差別が日常的であった。その後、アメリカ合衆国を例にとると、アメリカ開拓者として優位に立つアングロサクソン系プロテスタント (WASP)¹⁾の文化と言語を習得することを要求する同化主義、「アングロサクソン系の人々と他の民族とが生物学的にも文化的にも融合することによってアメリカ固有の新しい文化を出現させる」²⁾という人種のるつぼ論 (Melting pot theory) として、融合主義の考え方へと変化してきた。ただ、その対象者はヨーロッパ系のエスニック集団であり、アジア系やアフリカ系、ネイティブインディアンなどは対象外であった。しかし、1960年代からのバスボイコット運動³⁾を契機に、キング牧師⁴⁾らを中心とした公民権運動⁵⁾などを通して、白人とエスニックマイノリティの相互理解の試みが芽生え、それぞれの文化を尊重し合う多文化主義の考え方が生まれたのである。

(2) 世界に広がるコミュニケーションツールとしての英語

言語はその民族のアイデンティティを形成する重要な役割を担ってきた。英語を母語とする人々は、ENL (English as a Native Language) として言語を習得し使用してきた。しかし、国際化の進展で、国境を越えて移住した人々は、第二言語 (ESL: English as a Second Language) として移住先で学んでいる。また、多くの国で、外国語としての英語 (EFL: English as a Foreign Language) を学んでいる。ただ、そこでは、ENLが基準にあり、発音もできるだけネイティブに近づくことが求められた。

しかし、多文化主義の考え方は、言語の在り方にも大きな影響を与えた。言語は、コミュニケーションツールとしての役割が重視され、「国際言語」⁶⁾としての英語(EIL: English as an International Language)や地球語⁷⁾(Global Language)としての英語が使用されるようになってきた。

この傾向は、当初、イギリスなどの植民地であった国や地域が英語使用国であったが、グローバル化の進展の中で、民間企業の経済活動が国際規模で行われたり、アメリカ合衆国のカジュアルな文化が若者中心に世界に広まったりして、ますます英語の使用が広まったのである。

このような傾向は、アジア圏の経済的成長によって世界とのつながりを強めている東南アジアや東アジア諸国では、英語教育の普及、強化へとつながってきた。このような世界的な動向も見ながら、日本でも、グローバル人材の育成とともに、英語教育強化へと舵を切ったのである。

3. 小学校外国語(英語)教育への挑戦

(1) 新学習指導要領での小学校外国語(英語)教育

新学習指導要領が公表され、新たな時代に向けて、大きく教育を変える内容が提示された。新学習指導要領の改訂の経緯の中で、その改訂の背景にある社会認識や学校教育に求められることを次のように述べている⁸⁾。「今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えている」「成熟社会を迎えた我が国にあっては、一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくこと」への期待が述べられ、その学校教育として、「子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新しい価値につなげていくこと」などが求められているのである。

そして、今回の学習指導要領の改訂の基本方針として、社会に開かれた教育課程、教科等の目標及び内容の「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱、主体的で対話的な深い学び、教科等横断的な学習等の実現に向けた学校全体としてのカリキュラムマネジメントなど、知識伝達型の教育を脱し、新たな時代に向けた「つながる教育」が求められているのである。

このような教育改革の中で、小学校では、英語教育がいよいよ本格的な教科として扱われ、3,4年生の外国語活動、5,6年生の外国語教育へと拡大されたのである。その教科としての外国語科導入には、次のような意図と課題があったのである⁹⁾。「外国語によるコミュニケーション能力は、一部の業種や職種だけではなく、生涯にわたる様々な場面で必要」となる。しかし、小学校では、平成23年度から高学年において外国語活動が導入されたが、「①音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声か

ら文字への学習に円滑に接続されていない、②日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題がある、③高学年は、児童の抽象的な思考力が高まる段階であり、より体系的な学習が求められる課題」、さらに、「学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲に課題」「学校間の接続が十分とは言えない」などの多くの課題があげられていた。

小学校外国語教育は、中学校以降の外国語教育との関連もあり、日本の外国語教育の中でも大きな転換点になる。5, 6年生では、文字も入り、より英語教育の質も求められてきているが、学習指導要領改訂の基本方針にある教育を具現化するには、カリキュラムマネジメントの視点を活かし、他教科との連携などを通じた学習の知を生かした多様な学びが求められていると考える。小学校で使用される予定の文部科学省の新しい教材『We Can!』でも、「I want to go to Italy」のように、社会科での国際理解教育の学びを生かした内容を扱う工夫がなされている¹⁰⁾。

しかし、このカリキュラムマネジメントを具体化するためには、教育自体への基本的な考え方から言語的側面も含めた方法論に至るまでの検討が必要である。

(2) 英語教育の指導法の動向とその背景

英語教育が小学校段階に導入されるにあたって、どのような方法を用いるかは大きな課題である。英語教育の教授法も、様々な時代背景や理論研究の成果を受けて、変化してきている。

古くから存在する教授法である文法訳読法 (Grammar Translation Method, GTM) は、「ヨーロッパで古典語 (ギリシャ語やラテン語) を指導する際に中世から用いられる方法に端を発している」¹¹⁾。日本においては、現在も授業で行われている教授法でもある。しかし、長年英語を学習しても、英語でコミュニケーションができないと批判を受けて、実践的なコミュニケーション能力の育成へと変化してきているのである。

このために、スピーキングとリスニング能力の育成を目指して、1960年代以降、世界に広がったのが、オーラル・アプローチ (Oral Approach / Audiolingual Method) である。このアプローチは、音声中心であり、教師が英語でモデルダイアログを発話し、それを学習者がリピートする。その過程で、ほめたり、励ましたり、修正したりしながら繰り返して進めるやり方である。実際のコミュニケーションの場面を想定してパターンプラクティスとして実施されることも多い。このアプローチの基礎に、「行動心理学の基本原則である刺激 (Stimulus) - 反応 (Response)」、「段階を追う、ステップ・バイ・ステップのテクニクの応用」¹²⁾と「言語はそれぞれ特有な構造を持った規則的な体系である」と捉える「構造主義言語学」¹³⁾がある。ただ、この方法は、「形式的正しさが重視され、学習者の文法的誤りにこだわった結果、コミュニケーション能力の軽視につながった」¹⁴⁾など、欠点があげられている。

このような指導法に対して、コミュニケーションの能力の育成が重視されていることから、現在の中心的な指導法が、コミュニカティブ・アプローチ (Communicative

Approach) とも呼ばれる CLT (Communicative Language Teaching) である。この CLT では、「意味の伝達や言語の持つ機能の使用といったコミュニケーションのための言語運用能力に重点を置き、実際に言語が使用される状況や場面を設定して、そこでのコミュニケーション演習を行わせる」¹⁵⁾のである。このコミュニケーション・アプローチでは、ペアワークやグループワーク、シミュレーション、ロールプレイなどのアクティビティが多用されるのである。国際理解教育やグローバル教育で開発された様々なアクティビティや体験型学習法が英語の学習と結びついているとも言える。このアプローチの中で関心を持たれているのが、タスクに基づく言語指導 (Task-based Language Teaching; TBLT) である。TBLT は、「目標を達成するための活動を行うタスク (課題) を学習者に与えることによって、その活動の過程で英語学習を行わせるものであり、」「学習者は、与えられたタスクを達成する過程において、英語を用いた意味の理解や伝達、交渉を行わなければならない、文法や語彙といった言語形式の学習だけではなく、コミュニケーションを通じて目標言語の習得を行う」¹⁶⁾のである。この学習において、学習者に与えるタスクが、日常的な生活のものであっても、学習者の年齢や関心意欲、理解力などを考慮し、適切なものでなければならない。ただ、この TBLT は、学習者中心の学習であり、教師の役割は大きく変わる。つまり、従来の文法訳読法やオーラル・アプローチのように教師中心ではなく、教師は、タスクの場面を作ったり、学習者の意欲を引き出すファシリテータの役割を担ったり、進行過程をモニターしたり、新たな役割も必要なのである。

もう一つの外国語学習の流れで、アメリカなど移民の多い国での社会的な動向において、革新的な方法として「イマージョン・プログラム」や「バイリンガル教育」が考案された。イマージョン・プログラムは、「学校で使用されている言語は家庭の言語とは異なり、児童は新しい言語で教科内容を学ぶ」方法である。もう一つのバイリンガル教育プログラムは、移民の児童の増加に対応して、「英語を母語としない児童に、教科内容を彼等の母語と英語の両方で教える」のである¹⁷⁾。このバイリンガル教育では、2つの言語が均等に使用されているのではなく、目的によって、「移行型バイリンガル教育 (transition bilingual education) と維持型バイリンガル教育 (maintenance bilingual education)」¹⁸⁾に分けられるなど、多様な方法がある。

このイマージョン教育とバイリンガル教育は、これからの日本の小学校外国語教育を考えるにあたって、教科学習と言語学習の相互関係を考える上では、重要なヒントにもなる教育である。私自身が、ニューヨークに3年間滞在している間に、多くの現地校を訪問し、たくさんの教室を参観してきたが、このバイリンガル教師が実際に、学級担任と共に、教科学習を教えているところを見てきた¹⁹⁾。言語の学習だけの発想ではなく、教科で学ぶ内容とつながる言語学習が学習意欲を喚起し、学級集団のよりよい人間関係も含めて効果があると言える。

このように、それぞれの指導法の動向や海外での言語教育の動向を見てきたが、これからの日本の小学校外国語教育において、注目したいのが、内容言語統合型学習

(Content and Language Learning; CLIL) である。これは、教科での学習知と外国語学習をつなぐ方法であり、カリキュラムマネジメントとの視点からも、検討していきたい。

(3) 内容言語統合型学習 (CLIL) と小学校英語教育での可能性

内容言語統合型学習 (CLIL) は、Content, Communication, Cognition, Community/Culture の「4つのCにわたる知識や能力を言語活動によって統合的に育成する教育であり、コミュニケーション能力や Thinking Skill を高めることにもつながる」²⁰⁾ 指導法である。つまり、「内容学習 (他教科や専門トピック) と語学学習 (言語知識や4技能) を効果的に結びつけることにより、学習の相乗効果を生み出そうとするのが CLIL の重要な目標」であり、「ヨーロッパの EFL 環境下で非ネイティブ教師が指導する方式」として広がったのである²¹⁾。この4つのCは、内容・言語・思考・協学と訳されるが、これらを一つのシステムとして捉えるところに、特徴がある。

この学びの過程は、外国語学習と社会科の学習の知を融合するという研究においても、たいへん有効な視点となる。

まず、社会科の学習において、地球的課題や地域の問題の探究的活動から学んだ学習知と学びの方法を活かして、問題解決に向けての情報分析や考察、批判的思考、学習者同士や地域の人々との対話的な学び、コミュニケーション、そして、実行するための企画力、行動力、協働性等を動員して実践していくのである。この学びの過程から、学びに向かう主体的な態度形成や価値形成が生じるのである。そして、言語活動は、深い思考やコミュニケーションを図るなど、この学びの過程の中で常に重要な役割を担うのである。さらに、問題解決に向けての発信活動をしていく過程で、より深い理解とわかりやすい表現や表現方法が求められるが、学習者同士の協働的な学びを通して、より深い言語運用能力も身に付くのである。

このような活動を行うには、教師自身が、言語面だけに関心を持つのではなく、言語面と教科学習の知をつなぐ発想を常に持つような視点や姿勢が必要と言えるのである。小学校の場合は、ほぼ学級担任が各教科指導や教材研究も実施しており、このつなぐ発想からの授業実践が作りやすいとも言える。ただ、小学校の英語に関しては、語彙数や文構造の限定など、いろいろな制約もあるので、CLIL を実施するための内容の精選や簡易化、学習方法の言語の壁を低くする方法など、研究すべき課題は多いと言える。

4. 小学校英語教育での社会科の学習知との融合へ向けて

(1) カリキュラムマネジメントを生かし、言語の壁を低くする英語授業の創出

小学校での学級担任が直接担当したり、関わったりする英語教育でのカリキュラムマネジメントの視点からの CLIL を活かした実践は、これからの小学校外国語教育に

において大きな可能性を示すものである。ただ、そこには、教師自身の姿勢と言語の壁があった。

そこで、教師の姿勢には、学習自体の問い直しが必要であり、方法の工夫が重要と言える。つまり、教師自身がテキスト中心の学習から学びの空間や身体活動などコンテキスト型の学びへと転換することが重要である。これは、「習得メタファー」から「参加メタファー」への転換²²⁾であり、ヴィゴツキーの考えを基にした「社会文化的アプローチ」²³⁾の導入とも言える。そこでは、教科の枠だけでなく教科をつなぐ、教室の枠だけでなく、学校をひらき、地域とつなぐ、そして、個別の学習の枠だけでなく学び合う仲間をつなぐという「ピリヤードモデルからウェブモデル」²⁴⁾への転換を英語教育の中では実施していくことが重要となる。そのためには、学びの方法そのものの問い直しが必要なのである。特に、小学校英語教育では、限られた語数や文構造もあり、戦略的な発想の転換が必要となる。

学びの対象としての事象を発音と文字で意味づけている学習に対して、具体物でリアリティを模倣的に表現した絵やパノラマやジオラマでの学び合いは、モノの名前を知らなくても、指示語で共有でき、学習者や教師が発音する言葉から学び取ることができる。さらに、協働的に学び合うので協力性や役割取得ができ、自尊感情も高まり、学習意欲も高まる。さらに、そこでの学び合いを土台に、身体表現を使う劇化で、学びの対象の事象を具体物、身体、協力性をもとに、発音と文字を補う形で認知できるので、言語の壁を低くした学び合いになるのである。それ故に、外国人児童生徒や異年齢の子どもたちも協働して学び合えるのである。さらに、これを映像化することによって、国境を越えて、大陸間をつなぐ学び合いへと発展するのである²⁵⁾。

(2) CLIL 的な取り組みから創る英語学習

このつなぐ発想を持ち、具体的な教材を作ろうとする教師の学級では、教科の学習をしながらも、これは英語でどう言うのだろうか、何と表現したらいいのだろうかという雰囲気が生まれてくる。そこには、いろいろなレベルで、英語とつなぐことが可能となり、学級担任は子どもたちの実態に応じて実践できるのである。二五義博の社会科内容を取り入れた英語指導例を見てみる²⁶⁾。

活動例 1：国名チャンツ

国旗を見て、国の名前を答える。リズムに合わせて国名チャンツをする。

活動例 2：首都の名前や位置の学習

世界地図を見て、首都や国の位置を指で示す。国のシルエットを見て首都を言う。

活動例 3：国をいろいろな基準で分類

国の面積、寒暖、東西南北の位置、生き物の生息地域、野菜・果物の原産地

活動例 4：社会科クイズの作成

ジェスチャーを見て、国の名前を当てる。

活動例5：班で協力して世界一周

社会科の教科書や資料集を利用しながら、その国に行きたい理由を考える。見たいもの（象徴物、特産物）、食べたいもの（料理）、したいこと（スポーツ、文化）＋ α （歴史など自由）I want to see/eat/play/study/make～。

このように、学年の発達段階にあった内容で授業を展開すると、子どもたちも意欲的に学習に臨め、二五は研究結果を次のように述べている²⁷⁾。「内容が簡単すぎたり難しすぎたりしない限り、CLILの4つの軸とする活動は児童の知的好奇心を刺激し、社会科の教材により児童の英語学習意欲は高められる。他教科を学びながらコミュニケーションをとることで、英語学習を強く意識することなく、インプット量を自然に増やし“聞く”“話す”の定着を図ることができる。写真、イラスト、小道具、図表などの視覚情報を多く使い、協同学習で助け合いをさせれば、内容への理解はより高められ、バランスよく言語と内容の両方の習得」は十分可能である。

このような英語教育における動向を踏まえると、これからの日本の小学校英語教育において、CLIL的視点での実践創出の在り方と教材、指導法を創り出していくことの意義が出てくる。

この視点で捉え直してみたいのが、三省堂の“KIDS CROWN”という小学校英語のテキストである。このテキストには、スタンダードコースとアドバンストコースの2つのテキストが用意されているが、アドバンストコースのテキストの基本方針が、「他教科との関連や、時間的、空間的な広がり重視し、高学年の子どもたちの生活や知的レベルにふさわしい題材を選び」、それを一枚のパノラマの中に、その教科で出てくる語彙や様子を入れてある。児童が教科の学習をしながら、英語では何と云うのかなと関心を持つ構造にしてあるのである。そのために、各教科での学びとリンクするパノラマの絵は、多様な学び方がある。例えば、ユニット2：虫に関する語彙の絵では、Touching gameとして、Touch the butterfly. Can you find the beetles? ユニット3：スポーツに関する語彙の絵では、How many skateboards are there? など、簡単なレベルから、次第に難易度も上げていく活動である²⁸⁾。テキストの最後には、Global Studyという地球的課題（グローバルイシュー）を扱っているのである。

5. 地球的課題から創る英語の教材づくり

(1) 社会科や国際理解教育で学ぶ地域や地球的課題

社会科の教科書²⁹⁾で国際理解教育や地球的課題はどのように扱われているか見てみる。3・4年では、「風水害から暮らしを守る」、「⑤住みよいくらしをつくる」の単元で、水はどこから、水の循環、再生可能なエネルギー、郷土の発展につくすが取り上げられている。5年になると、「①わたしたちの国土」の単元で、世界の大陸と海洋、世界の国々と国旗、世界の主な川、低い土地のくらしと水害から守るくふう、国土の

気候の特色、つゆ・台風・季節風、アイヌの人々、「②わたしたちの生活と食料生産」で、米づくりに欠かせない水、環境と食料生産、「③わたしたちの生活と工業生産」では、持続可能な社会をめざして、環境問題・エネルギー問題、自動車開発、再生可能なエネルギー、「⑤わたしたちの生活と環境」で、日本の森林、水資源、地球温暖化、公害、自然災害が取り上げられている。そして、6年になると、「②わたしたちの生活と政治」で、震災復興の願いを実現する政治、「③世界の中の日本」で、日本とつながりの深い国：多文化社会、世界の未来と日本の役割：アフリカ開発会議、国際連合、国際紛争、環境問題 地球温暖化、海面上昇、熱帯雨林の減少、砂漠化、酸性雨、水や大気のごち、持続可能な社会、京都議定書、環境問題は世界全体で取り組むべき問題、国際協力、青年海外協力隊、ODA（政府開発援助）、世界の国々と日本の交流 オリンピック・パラリンピック、歴史の中での世界との深いつながりなど、多くの地域や地球的課題も、社会科の中で学んでいるのである。

これらの社会科での豊かな学習知を活かし、グループでの協同的な学び合いによって、地球的課題を英語で取り上げていこうと考えたのである。このテーマを提案した時、まずは小学校英語では難しいという声が多数であった。しかし、教科学習とつなげ、言語の壁を低くする方法、そして、個人が学習するという発想から社会文化的なアプローチにあるように、学びの環境の中で、共に学ぶ仲間、様々な具体物やパノラマのイラストなどと相互作用しながら学び合っていく方法をしかけ、教師自身も、言語の側面だけではなく、社会関係的な側面にも配慮し、常につなげていく姿勢で行い、事前に教科の学習で学んでいることを踏まえれば、この地球的課題を扱う学習も可能であると考えた。

(2) 地球的課題を扱う Global Study の教材開発

この「Global Study 世界のさまざまな問題に目を向けてみよう」は、私自身が構想し、提案した教材であり³⁰⁾、次のようなねらいを持った教材である。

- ・パノラマを見ながら、地球的課題（グローバル・イシューズ）についての関心を高め、国際理解の心やこれからの地球時代を生きるための考える力を育む。
- ・基本的な地球的課題の内容について英語で聞き、英語の音・表現に親しむ。
- ・英語での理解を通して、地球的課題で取り組む人々との一体感を促し、総合的な学習や国際交流活動へとつなげる。

個別に地球的課題である酸性雨や砂漠化、地球温暖化などを分けて描くのではなく、見開き2ページにわたるパノラマの絵³¹⁾に、相互のつながりや比較思考、因果関係、構造機能主義的な思考など、小学校高学年で培われる思考力も生かせるように、いろいろな地球的課題をわかりやすく提示しているのである（図1）。



図1. KIDS CROWN アドバンスコース Global Study

具体的には、地球的課題として深刻な問題になっている事象を示す左の島、その課題解決を未来志向の視点から描いた右の島、現実社会での問題解決への取り組みや日常生活での課題を示す手前の島と三つに川で分け、比較による思考や相互のつながりを考察できるようにイラストで表している。この単純化し、対照的な配置をしたイラストによって、小学校段階の子どもたちの思考力と社会的な視点取得能力³²⁾、共感性、既習の学習知から、悲しい出来事とうれしい出来事、対立と平和、貧しさと豊かさ、バリアとバリアフリー、排ガスの車や大気汚染とクリーンエネルギーやきれいな空、大量の廃棄物やごみとリサイクル、野生動物の絶滅の危機と野生動物との共生など、持続可能な地球社会を具体的なパノラマの絵で示しているのである。

このパノラマの絵を英語の語彙³³⁾について、考察してみる。大気汚染 air pollution, 発電所 power plant, 木材 lumber, 旱魃 draught, 絶滅危惧種 endangered species, 森林伐採 deforestation, 生ごみ garbage, 産業廃棄物 industrial waste, けんか fight, 排気ガス exhaust, 植林 afforestation, 点字 Braille, 風車 windmill, 太陽エネルギー solar energy, 車いす wheelchair, バリアフリー barrier-free, 盲導犬 seeing-eye dog, 救助犬 rescue dog, 飢餓 hunger, 資源再利用 recycling, ボランティアの人々 volunteer, この語彙を見ると、従来の小学校英語の単元で出てくる数やカラー、天気、季節、食べ物、スポーツ名などの語彙と比べて、極めて難しく感じるものである。

しかし、ここには、パノラマの絵で具体的に地球的課題が提示され、社会科や理科などでの学習知を活かし、更に、協同的な学び合いなどを導入して実施することによって、この学習は可能となるのである。英文によるCDスクリプトの一部を紹介³⁴⁾

し、考察してみたい。

Now what do you see there? You can see the brown land on the left, and the green land on the right. What is happening there? Let's start from the page on the left. Look at the building with many chimneys. How many chimneys do you see there? Yes, six. There are six chimneys, and they are spouting black smoke. Look at the cloud above. It looks sad.

また、右のパノラマを見て、豊かな自然の中で過ごしている動物たちを探したり、平和の祭典であるオリンピックに注目したり、様々な気づきと学びができるのである。

Do you see the big stadium? A man in a red jacket is holding a Japanese national flag, and the man in a green jacket is holding a Kenyan national flag. They are marching happily. Do you see more national flags? Can you see the names of the countries? Korea.

Yes, that's right, and what is the next one? Of course, that is the flag of the U.S.A.

これらのパノラマについての相互コミュニケーションを見てもわかるように、英文の構造としては、決して難しいものではなくても、子どもたちから、大気汚染や平和など地球的課題の内容をつかむことができるのである。

CLILの4つのキーワード Content, Communication, Cognition, Community/Culture の側面から見ても、まず地球的課題（グローバルイシュー）としての Content（内容）の学習があり、その学習課題を Communication（コミュニケーション）しながら、探究し、その学びの過程で、大量のけむりと大気汚染などの因果関係の思考、争いと共生などの比較する思考など、子どもたちの Cognition（思考活動）を最大限生かし合いながら、グループワークや体験活動を通して、学級社会自体が、Think Globally, Act Locally の Culture（文化）を生み出し、Community（コミュニティ）としての Global classroom（地球教室）を創り出すのである。

6. おわりに

地球的課題（グローバルイシュー）や国連が新たに設けた SDGs（持続可能な開発目標）に対して、地球社会の人々は我が身の出来事として対応していかなければならない。大陸を越えて世界の人々が学び合うことは、これからの未来の地域社会、地球社会を担う人々にとって、極めて重要な意味を持っていると言える。

昨年、この大陸を越えた学び合いと世界へ水の大切さを訴えるメッセージの発信を日本とフランス、西アフリカのブルキナファソの子どもたちが、ミュージカルを通して実施した³⁵⁾。この実践を更に進展させるために、新たに国際言語としての英語を使いながら交流することをめざしているのである。

この小学校英語は語彙数も限りがあり、このようなテーマは難しいと思われてきた。しかし、具体物やイラストマップ、映像など言語の壁を低くする手法を通した学び合いによって可能となるのである。

■注

- 1) 越智道雄『ワस्प (WASP)』中央公論新社 p.4 1998年
- 2) 小林宏美『多文化社会アメリカの二言語教育と市民意識』慶應義塾大学出版会 p.31 2008年
- 3) 宇土泰寛「モントゴメリーのバスーキング牧師とバスボイコット運動」文部省『社会のルールを大切に作る心を育てる』pp.78-81 1996年
- 4) 辻内鏡人、中條献『キング牧師 人種の平等と人間愛を求めて』岩波書店 1993年
- 5) 本田創造『アメリカ黒人の歴史』岩波書店 1991年
- 6) 本名信行『世界の英語を歩く』集英社 p.14 2003年
- 7) D.クリスタル、國弘正雄訳『地球語としての英語』みすず書房 p.9 1999年
- 8) 小学校学習指導要領解説 外国語編 p.1 2017年
- 9) 小学校学習指導要領解説 外国語編 pp.5-6 2017年
- 10) 文部科学省 新学習指導要領対応 小学校外国語教材『We Can! ①』pp.42-48
- 11) 若松夏美、今井由美子、大塚朝美、杉森直樹『国際語としての英語 進化する英語科教育法』松柏社 p.77 2017年
- 12) 同上 p.69
- 13) 金森強『小学校の英語教育 指導者に求められる理論と実践』教育出版 p.63 2003年
- 14) 同上 p.65
- 15) 若松夏美、今井由美子、大塚朝美、杉森直樹 前掲書 p.54
- 16) 同上 p.56
- 17) H.カーテン、C.A.B.ベソーラ『児童外国語ハンドブック』大修館書店 p.18 1999年
- 18) コリン・ペーカー『バイリンガル教育と第二言語習得』大修館書店 p.181 1996年
- 19) 宇土泰寛『地球号の子どもたち 宇宙船地球号と地球子ども教室』創友社 pp.73-74 2000年
- 20) 金森強、本多敏幸、泉恵美子『主体的な学びをめざす小学校英語教育 教科化からの新しい展開』教育出版 p.106 2017年
- 21) 二五義博「CLILを応用した二刀流英語指導法の可能性—小学校高学年児童に社会科内容を取り入れた指導を通して—“JES Journal” Vol.14 小学校英語教育学会 p.69 2014
- 22) 山下隆史「学習を見直す」、『文化と歴史の中の学習と学習者』凡人社 p.7 2005年
- 23) バーバラ・ロゴフ、當眞千賀子訳『文化的営みとしての発達—個人、世代、コミュニティ—』新曜社 p.10 2006年
- 24) Graham Pike & David Selby, *Global Teacher, Global Learner*, Hodder and Stoughton, p.4 1988年
- 25) 宇土泰寛「社会科における水問題とSDGsのための多様な教育的アプローチ—プロジェクト学習の方法としての大陸間ミュージカルとジオラマー—」椋山女学園大学教育学部紀要 Vol.10 pp.241-243 2017年
- 26) 二五義博 前掲書 pp.73-75
- 27) 同上 p.80
- 28) 『KIDS CROWN アドバンストコース』三省堂 編集委員：渡邊時夫、宇土泰寛他、2004年
- 29) 北俊夫、小原友行、吉田伸之ほか38名「新編 新しい社会 3・4年、5年上・下、6年下」東京書籍 2015年
- 30) 『KIDS CROWN アドバンストコース』三省堂 編集委員：渡邊時夫、宇土泰寛他、2004年
- 31) 同上 pp.69-70
- 32) 塘利枝子「発達心理学から見た異文化間能力—発達段階を考慮した異文化間能力のモデル化に向けて—」『異文化間教育』45 異文化間教育学会 p.55 2017年
- 33) 渡邊時夫、宇土泰寛他『KIDS CROWN アドバンストコース 教師用指導書』三省堂 p.113 2004年
- 34) 同上 pp.113-114
- 35) 宇土泰寛 2017年 前掲書 p.241